

## インタビュー

# 雑草抑制処理工法など環境分野での技術開発を展開 勇気を持って挑戦し、感動を社員と共に分かち合う

関根 賢一 初雁興業株式会社代表取締役社長



関根 賢一 氏

- 1947年 埼玉県入間市出身
- 69年 東洋大学工学部土木工学科卒業
- 同年 日本舗道株式会社入社
- 73年 同社退社
- 同年 初雁興業株式会社入社
- 2001年 同社取締役社長に就任

川越市に本社を置く初雁興業株式会社は、土木建築工事を主力事業とする建設会社である。

戦後の荒廃した国土を建設の力で復興しようと決意した創業者の関根初治氏。そして、高度経済成長期にインフラ整備の土木工事で地域に貢献し、現在の初雁興業を築いた関根時治現会長と歴史を重ねてきた。2001年に社長に就任した賢一氏は、技術力の向上を目指して社内体制を整え、本業の土木工事で難度の高い事業に挑戦するとともに環境優先の施工方法の技術開発にも力を入れる。アークサンド（リサイクル砂）を使う「雑草抑制処理工法」などを開発し、公共事業縮小で苦戦を強いられている業界の中であって、好調を堅

持している。

「会社の財産は『人』社員の幸せが一番。顧客満足もそこから生まれる。社員と一体感をもって難度の高い仕事への勇気ある挑戦をしたい」と語る。

### 由緒ある初雁の名を頂き、事業を再スタート 経済成長期の花型産業を経て変革の時代へ

——前身の関根組は明治時代に創業ということですが、初雁興業として再スタートした経緯と社名の由来についてお聞かせください。

初雁興業の創業者である関根初治の本家が明治時代から関根組として土木建築請負業を行っていました。個人経営から株式会社になり、かなり手広くやっていたようですが、戦争で営業を中断していました。

戦後、荒廃した国土を復興したいという思いにかられた父の初治は、本家の伯父関根育太郎氏を訪ね「これからは建設業の時代だ。もう一度会社を興そう。建設の力がなければ、経済復興は無理だ」と関根組の再興をもちかけ、初雁興業株式会社と商号を変更して再スタートを切りました。それが1947年、ちょうど私が生まれた年です。

川越は小江戸と呼ばれ、市内にある三芳野神社の裏手の杉の老木には北の空から飛んできた雁が毎年決まってこの杉の木の上で三回旋回して南の空に飛び立ったということから、川越城は別名「初雁城」と呼ばれ、市内には初雁と名のつく橋や学校があります。初雁は川越の通称として広く認知された名称で、その名前を頂いて「初雁興業」としたのです。

父の初治が市議会議員に立候補したことで、

家業は長男の関根時治（現会長）に引き継がれました。27歳という若さで社長に就任した兄は2001年までの43年間社長を続け、今日の初雁興業を築き上げました。

その間の日本経済は、人口増加に伴って鉄道、道路、あるいは災害に強い国土の建設や快適な住環境と、国民総生産の18%が建設投資額となり、全就労者の10人に1人が建設業に従事、建設業はまさに日本経済の担い手、花形産業であったわけです。しかしその反面、技術者の不足が深刻で、専門に建築を学んだような人材の採用は難しく、時には失敗も重ねながら公共土木工事を主力事業に据えて、会社は成長を続けてきました。

しかし、半世紀続いた右肩上がりの経済もあらゆる産業が構造改革、価格競争にさらされる苦悩と対峙することとなりました。特に建設業界の談合体質との決別は一大変革と言わざるを得ません。当社もそうしたご指摘を受けた経過があり、事業の継続さえも危惧されかねない状況になったのです。

そのように建設業に対する風評が厳しくなる中で、兄から社長を引き継いで三代目社長となりました。

## 談合体質からの脱却で技術力の差が鮮明に 2つの大規模事業で「技術の初雁」アピール

——社長に就任し、難局を乗り切るためにどのようなことに取り組みましたか。

9年前、社長に就任して会社をどのように変革しようかと考えました。まずは技術の研鑽に励むこと、そして企業倫理を実践してコンプライアンス経営を推進することに決めました。

その結果、わが社は伸びたのです。発注者



本社屋に設置されている創業者関根初治氏の胸像

側も入札制度改革で技術力を評価する総合評価方式に移行してくれました。つまり、技術力が重視されるようになったのです。改革前は縄張り意識のようなものがあって、地域を越えて仕事をするのは難しかったのですが、ある一定の基準をクリアすれば県内どの地域でも仕事が可能になったのです。

——技術力が重要になると、厳しい面もあるかと思いますが。

もちろんです。経営資源といわれる「ヒト、モノ、カネ」の中で、一番重要なのは「ヒト」です。社長になってすぐに始めたのが今も継続している「インプルービング サタデー」です。毎月第一土曜日を全社員の出勤日とし、テーマに応じて講師を呼んだり、時には私が講師になったり「土曜日に向上しよう」と勉強会を開き、技術力と意識の向上に取り組みました。

また、毎年技術発表会を行い、現場の担当所長が各現場のそれぞれの創意工夫した点を全社員の前で発表しています。

それから、作業現場は非常に危険を伴うので、安全第一でなければなりません。県内でも認証取得をしている会社は少ないと思いま







平成22年8月3日  
雑草がほとんど発生していないアークサンドが施工された中央分離帯

下鉄がぎりぎり通れるぐらいの大きさのトンネルを想像していただければよいかと思いますが、県内でもあまり実例がないような大規模工事でした。同様の工事实績や地質図を研究し、あるいはシールドマシン屋さんの技術者とともにマシンの独自仕様を検討しながら完成させました。

地上に遊水地がつかれない都市部では、洪水対策にこうした地下河川が増えると予想され、よい実績が残せたと思います。チャンスがあれば今後も挑戦していきたい分野です。

土木建築の世界で一番大切なことは勇気を持って挑戦することだと思います。ものづくりに「これでいい」はなく、これまで以上に難度の高い、あるいは規模の大きな仕事に果敢に挑戦していく。そうした仕事を社員に与えるのが社長の役割だと思います。

## 好調な業績を支える環境分野での技術開発 需要が見込まれる環境負荷低減の施工方法

— 今後はどんな分野への事業展開をお考えですか。

建設業の立場でできる環境分野への取り組み



水を干上がらせることなく沼底の汚泥を浄化する底泥資源化システム

みです。大学との共同技術開発で現在注目を浴びている環境対策工法が、雑草抑制処理工法と底泥資源化システムです。

雑草抑制処理工法は、市町村が収集した家庭ゴミの焼却灰等を再度燃焼することで無害化したアークサンド（リサイクル砂）を道路の中央分離帯などに敷きつめて雑草が生えるのを抑制する工法です。

アークサンドは、それ自体が水を吸収するため普通の砂と違って粒と粒の間に水が残りません。水分がないと植物の種は発芽できず、雑草が生えないという仕組みです。アークサンドを敷けば、化学合成物質の除草剤を使うこともなく、草刈のための人件費や作業に伴う車線規制で生じる渋滞を低減することができます。渋滞によるCO<sub>2</sub>の削減、そして表面温度もコンクリートやアスファルトに比べて低いのでヒートアイランド現象の緩和にもつながる環境対策工法です。

アークサンドの生産工場は寄居町にあり、県産品になっています。また、県の「新製品・新技術紹介制度」にも登録されているので、道路わきや公園の緑地帯など公共事業の施工例も徐々に増え、環境に負荷をかけない雑草



処理対策として今後の需要の伸びが見込まれています。

そして、もう一つの底泥資源化システム(生態系保全型攪拌ポンプ式湖沼底泥資源化システム)は、水を抜くことなく池の底のヘドロを特殊なポンプで吸い上げ、その場で水と泥を分離させてプレス機で泥の水分を取り除き、その泥をホームセンターなどで売っている育苗土の原料として資源化するシステムです。ヘドロには、窒素とリンが豊富に含まれているので、植物の栽培に適しているのです。

もともと湖沼の底泥処理は土木工事の仕事で、これは浚渫(水底の土砂をさらってとりのぞくこと)の小型版と考えていただければよいと思います。群馬県立高等工業専門学校との共同研究で開発したこのシステムの特長は、水を抜かずに底泥を処理できる点です。池の動植物がそのままよいこと、水を抜いたときのひどい悪臭の問題がクリアできること、ヘドロ対策工事にかかる処理費(底泥は産業廃棄物なので処理費がかかる)がこのシステムではかからないことです。

このようにゴミをリサイクルして土木工事の施工に利用したり、土木工事で出たものを再生して原料として活用したりと、建設業の立場でできる環境への負荷低減と循環型社会の実現が今後の大きなテーマになってくると思います。土木部を環境建設部と改名してこの分野に積極的に取り組んでいます。

### 地域社会から必要とされる企業を目指して そのためには社員の幸福が大切

——経営理念について伺います。

社訓に「社業を通じて常に社会に貢献すべし」とあるように、「社会にあって、なくて

はならない会社にしよう」と常に言っています。

土木事業はインフラの整備などを行い、地域とのつながりが非常に強い仕事です。大手ゼネコンには大手ゼネコンがやるべきことがあるし、我々地元業者には我々のやるべきことがあると考え、地域発展に貢献しようとさまざまな取り組みをしています。

例えば、危機管理対策です。当社には、災害や地震などの緊急時に役立つ人や機材があり、日ごろから訓練も行い、いざと言うときに地域の皆様のお役に立つ準備をしています。2010年春には、国土交通省より「建設会社における災害時の基礎的事業継続力」の認定を受けました。国土交通省が当社を認めて、災害時には力を発揮してくださいということです。もちろん埼玉県や川越市とも同様の協定を結んでいます。また、東京国際大学や埼玉工業大学とも防災協定を結んでいます。その他、県道を清掃するロードサポート支援なども行っています。

社員が常に携帯している当社のオリジナル手帳には、社訓や経営理念などのほかに被災時行動基準、大地震行動基準などが載っています。

そのほか社会貢献では、CO<sub>2</sub>削減対策として社員のハイブリットカー購入時には1割の補助金を出しています。これは2008年のCO<sub>2</sub>排出量抑制の協定「彩の国エコアップ宣言」以前から行っていました。また、少子化対策として結婚祝金は20万、出産祝金は第一子が10万円、第二子が20万円、先日第三子が誕生した社員には30万円の祝金を出しました。朝礼で祝金を受け取った社員は照れながら「もう一人がんばります」と言っていました。

——大変ユニークで心温まるお話ですが、経営者として大切だと思うことは何ですか。

企業にとって最も大切なのは人です。人は財産であり、財産はたくさんあるほうがいいわけです。とすれば人件費は多いほうがいいとなり、多い人件費を出しても「会社が成り立っていけるようにしよう」と社員に呼びかけています。顧客第一主義に異論はありませんが、顧客に満足を与えるためには社員が会社に満足していなければいけないと思います。時にはわがままな顧客を失っても社員を守るのが私の責務だと考えています。

社員の幸せとは何か。人に愛され、褒められ、役に立ち、必要とされること。では社長の私はどうか、社員に愛されているだろうか。このようなことを考えなければお互いの幸福はありません。企業は、社員の幸せのためにあり、社員の幸福を通して社会に貢献できるものです。私は、社員とその家族の幸せに責任を持ちたい、社員との一体感が大切であると思っています。

### 座右の銘は父からよく言われた「人生感動」 吉田拓郎の大ファン、毎日曲を聴き癒される

——座右の銘と尊敬する人物はおられますか。

父は「人は大きく、己は小さく、腹は立てず、気は長く」などいくつかの言葉を書でしたためてくれました。その中でいつも頭に残っているのが「人生感動」です。感動のない人生はあり得ません。心が動くと人も物も動く、人生は感動を求めて行動するといっても言い過ぎではありません。最近、人との出会いや本、音楽、スポーツなどどんなものにも感動し、人目をはばからず涙を流すことができるようになりました。思いっきり涙を流

せる、そんな感動を求めて人生を送っていきたいと思います。

歴史上には立派な人たちがたくさんいますが、時代を共に過ごした人こそが尊敬すべき人物だと思います。尊敬というかけがえのない人です。それは、父の関根初治、元県知事の土屋義彦先生、そして吉田拓郎です。土屋先生は人間味あふれる人柄で、常に休むことなく働き続ける、勇気を持って挑戦することを教えていただきました。

——ご趣味は吉田拓郎の音楽鑑賞ですか。

毎日、彼の音楽を聴いていますが、これほど心を癒してくれる人はいません。同じ時代を生きていてよかったとつくづく思います。伝説のつま恋コンサートにも行っていますし、コンサートには必ず出かけます。彼が出したものはすべて、ペラペラのソノシートから全部持っています。それが私のお宝です。吉田拓郎は私の人生から決してはずせない人です。——これからの建設業の方向や社員第一の経営など、感動を求めて常に前向きな姿勢の社長様のお話に時間があっという間に過ぎました。

本日は、ありがとうございました。

### 初雁興業株式会社概要

設立	1947年
資本金	1億1200万円
完工高	110億円（平成22年度6月期）
従業員数	115名
所在地	〒350-0815 川越市大字鯨井1705-2
電話	049-231-0800
ホームページ	<a href="http://www.hazkari.co.jp/">http://www.hazkari.co.jp/</a>
取引店	川越支店